

い肌と
色い隊長

菊地政男

文藝春秋新社

白い肌と黄色い隊長

昭和三十五年一月三十日初版
昭和三十五年二月十日再版

定価 二五〇円

著者 菊地 政男

発行者 車谷 弘

発行所 文藝春秋新社

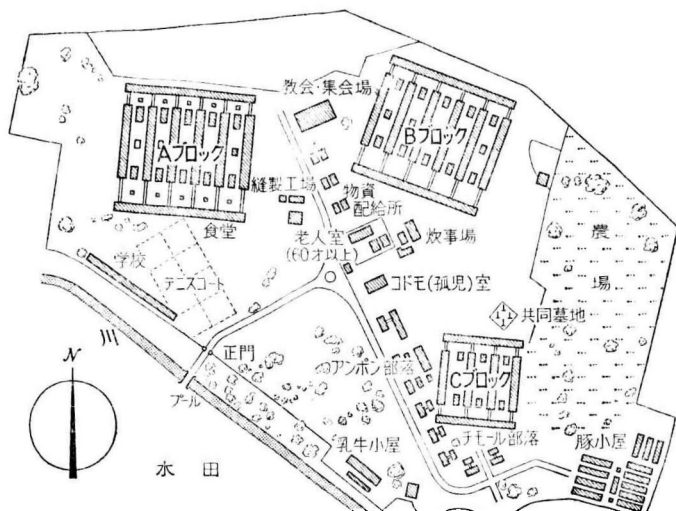
東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

目 次

敵性国婦女子抑留所長	五
カンピリ修道院	二二
ヨーストラ夫人	三七
自給自足体制	五四
学校と託児所	六六
花ある樂園	八七
「女の布地」	一〇三
クリスマス・パーティー	一三七
高官用慰安婦	一五六
B 24 の爆撃	一七九
涙の感謝状	二〇六
戦犯容疑者	二二七

白い肌と黄色い隊長



(抑留所見取図・戦後ヨーストラ夫人より山地氏に贈られた写真より描く)

敵性国婦女子抑留所長

——昭和十七年八月のある晴れた午後、セレベス島マカッサル市の、日本海軍民政部から、静かにすべり出た一台の黒塗りのフォードがあった。同乗者は、一人の海軍士官と若い下士官——カンピリ抑留所の担任者だった河原中尉と、今日から民政部勤務を命じられたマカッサル海軍陸上警備隊の一分隊長の海軍二等兵曹の山地正である。

「暑いなア！ 全く暑い！ 毎日こう暑くては、やり切れんなア」

河原中尉は、白い日覆の正帽を脱いで額の汗を拭き、誰にともなく言った。

たしかに暑かった。ここ一週間ばかり、名物のスコールも降らず、乾季に入ったマカッサルの街は、乾燥し切っていた。

熱帯特有の、あの眩しくキラキラと照りつける太陽は、街を灼き、榕樹やタマリンドの街路樹を灼き、そして舗装道路の照り返しは堪え難いものがあった。

いつもなら美しいと思って眺める火焰樹の、それこそ燃え立つような赤い花卉の色も、暑さのためか今日は腹立たしくさえ思える。

直径一米もある榕樹の樹蔭だけが、原住民たちの憩いの場所だった。客待ち顔の三輪車^{テガローグ}や、黒いソ
ンコ帽（回教徒の帽子）に、安物の原色のケバケバしいサロンをまとったインドネシア人が、決まっ
てその樹蔭に涼をとっている。

「とにかく、市内を抜ければ、少しは涼しくなる」

河原中尉は、もう一度、誰にともなく呟いて、汗を拭った。

マカッサルは、セレベス島の南端にある、古くから知られた貿易港である。人口は約九万、セレベ
ス島で一番大きな都市だった。

セレベス島は、K字型をした海岸線の長い山が高い島で面積は日本の本州の八割ぐらい、人口は六
百万ほどである。蘭領東印度領に属していたこの熱帯の島を、日本軍が占領したのは、太平洋戦争が
始まって間もない、昭和十七年の一月十日のことである。

山地兵曹は、マカッサル市の攻略作戦に参加し、引き続き占領地区警備の下士官として勤務してい
たのだった。警備といってもものきなもので、原住民のインドネシア人たちは、オランダ人から解放
してくれた日本軍に、すこぶる好意的だったし、フィリピンやマレー半島と違ってゲリラ部隊もい
ない。

物資は豊富だったし、まったく何処に戦争が起っているのだろうと訝かしくなるような、そんな平

和なマカッサル市であった。

市の中心にある蘭印政庁のセレベス支庁は、南西方面海軍民政府が置かれ、その周囲の官庁や、オランダ商社の煉瓦造りの建物には、根拠地隊司令部はじめ、同島に進駐している海軍の諸機関が入っていた。

かつて、この島を支配していたオランダ人の姿を、マカッサルの街で見かけることは困難だった。なぜなら、彼等はすべて、占領と同時に捕虜および抑留者に分類され、マカッサル市内、パレパレ地区、マリノ地区にわけて収容されていたからだ。

フォードは、下町の有名なマカッサル街ストリートを通り抜けて、南への道をとった。マカッサルとは市場のことで、このマカッサル街には華僑と、中立国であるアルメニア人などが、新しき支配者に対してまた商魂たくましく揉み手をしながら、昔交らぬ商売繁昌ぶりを示している。

華僑は、南方のいたるところの島に進出していた。マカッサル市内だけでも、一万五千人の華僑がいたのである。そして七万を越えるインドネシア人——厳密には、プギス族だの、トラジャ族だの、マカッサル族だの、ミナハサ族だの色々と種族はあるにはあったが——この原住民たちは、少数の官吏、教師、会社員をのぞけば、大部分が農民および労働者であった。

南西ボネ地方、とくにロンボバタン山を中心とする一帯は、火山性の肥沃な土壤にめぐまれ、水田が発達していた。そのほか、山地を利用して、コーヒー、玉蜀黍、ココヤシなどの栽培も盛んだった。だが、一口に言えば、セレベス島は未開発の島だと言ってよかった。鉄、金、銀、ニッケル、鉛、

マンガンなどの有望な鉱物が北部の山岳地帯にあることは、多くのオランダ人鉱山技師によって確認されていたが、殆ど手をつけていない状態なのである。

郊外へ出ると、見渡す限り水田地帯が広がっていた。目指すは南郊十四キロの、カンピリ部落である。

簾を頭上にのせて、原住民の女性が、跣足で焼けつくような道を歩いている。水の少くなった小川では、黒い水牛と戯れる子供たちの姿があった。

水田地帯が尽きると、今度は森だった。そしてまた平野——森——水田。いくつめかの森を通り抜けたとき、山地二等兵曹は、口の中で小さく「アッ」と言って、腰を浮かした。

「カンピリだ」

河原中尉は、けだるそうに答えた。

——そこには、いままでに見馴れない風景が展開されていた。緑に包まれた風景の中に、そこだけ赤、白、黄、といった特殊な色の——洗濯物らしいものが、干されているのが見えるのだ。それは豆粒のように小さかったが、近づくにつれて、だんだん大きくなり、女性たちが住んでいる一帯だということがハッキリ呑みこめるのだった。男性的な風景の中で、たしかにそこだけが女性的な雰囲気を持っていた。

「あれが……あれがテキセイコクフジョシヨクリュウシヨでありますね」

山地兵曹は、舌を噛みそうになりながら、やっと言い終えると、小さくひとつ武者振いしたのである。

テキセイコク・フジョシ・ヨクリュウショ。敵性国婦女子抑留所と書く。昔の日本の軍隊は、ややこしい言葉ばかり使っていたものだ。オランダはじめ連合軍側の女性、子供の抑留所のことなのである。

——その日の朝、海軍陸上警備隊に所属していた山地兵曹は、とつぜん第二十三特別根拠地隊の、先任参謀相沢中佐から出頭を命ぜられたのだった。

威儀を正して、山地兵曹が、この先任参謀の前に行くと、

「——山地兵曹」

と、相沢中佐は、ちょっとためらい勝ちに言ったのだ。

「突然だが、セレベス海軍民政部に派遣勤務を命ずる。任務は、敵性国婦女子抑留所勤務の予定である。詳細は、民政部と打合わせのこと。よろしいか？」

思わず山地兵曹は、勢よく靴の踵を鳴らしていた。

「復誦！ 山地二等兵曹は、本日よりセレベス海軍民政部に勤務いたします。任務は……」

だが、復誦しながらも、彼はその言葉の意味を、とっさには理解できなかったのだ……。

彼は小首をひねりながら、海軍陸上警備隊に戻った。そして横川警備隊長に、民政部に勤務を命ぜられたことを報告した。

「山地。さぞ面喰ったろうな」

隊長は、笑いながら言った。

「実はこんど、連合国側の非戦闘員婦女子の管理が、司令部から民政部に変更になったのだ。ところが民政部の文官は、誰も厭がって所長就任を承知しない。そこで、主計課長の元山中佐が、『山地なら当地進攻作戦以来、マカッサル地区にはくわしいし、各方面との連絡も良し人柄も温厚だからよろう』と、白羽の矢を立てたのだ。つまり貴様は、指命されて民政部から派遣申請となったわけだ。まア、ひとつ了解してくれ」

彼には、テキセイコクフジョシという言葉の意味が、ボンヤリ呑み込めたのだった。

一息入れる間もなく、彼はせき立てられるように、セレベス海軍民政部に出頭した。政務部長の高山海軍大佐は、山地兵曹を待ち構えていた。

その説明によると、彼の任務は、こうだった。

……昭和十七年一月十日、オランダ軍と日本軍は停戦協定を結んだ。日本側は、佐世保陸戦隊の浦川副官、オランダ側は、セレベス守備隊のホーレン司令官である。

この停戦協定で、連合国側の在留者は、捕虜、男子抑留者、婦女子抑留者と三分して処遇されることとなった。捕虜はマカッサル収容所に、非戦闘員男子はバレーレ抑留所に、そして十五歳以下の男の子供と婦女子は、マリノ地区で自活をさせられるという取決めができたのである。

マリノは、マカッサルから八十キロばかり離れた高原の避暑地だった。

この高原の避暑地マリノに、形式的だけの監視を立てられて自活をはじめた千八百名の婦女子たちが、どのような方向の生活を取ったか。

その婦女子の大部分は、マカッサルから移住した人々ばかりであった。自活といえ、ひどく開放的で自由のようだが、夫やわが子を離れた女性の自活——というのは、なかなか困難なものである。

いままで、顎で使ってきた原住民たちは、いまや敵であった。うっかり森の近くを散歩もできないのである。

収入を失った彼女たちに、「こりゃアいいカモだ」とばかり飛びついたのは、抜け目のない華僑たち。彼らは、彼女たちの弱身につけこんで、貴金属だの、宝石を引換えに、高いべら棒な闇値で食糧を売りつけ、その大半を物々交換してしまったのだった。

——そうになると女は弱い。マリノの避暑地には、日本軍の軍人が、視察と称し折にふれて遊びに行く。この情景は、戦後、進駐軍の兵士たちがチョコレートや毛布など持って、日本人の家庭に遊びにきた情景を想像して頂ければよいと思うし、何時の戦争でも進駐軍とはそうしたものであることを歴史が証明しているようである。

果然、日本人軍人と抑留女性、華僑と混血女などの風紀問題が起きた。セレベス島を占領中の日本海軍にとっては、好ましからざる事態が起きたのだ。その理由は、彼女たちが中流以上の家庭の婦人であるために、生活の道を知らず、売り食いに頼る以外に生活の術がなかったこと。日本軍の軍人にとっても、避暑地であるマリノのような慰安の場所が必要であったこと、の二つである。

そこで、いまや自活できなくなっている千八百名の婦女子を、マリノ地区からカンピリ地区に移し、保護を強化しよう、ということになったのだ。なぜなら、そうしなければ手持ちの金品は少くなる一

方だし自活出来なくなれば早晩ただならぬ事態になることは予想されたからだ。

「ところが、カンビリに収容したもの、生活は荒れてるし、言うことはきかないし、全く手に負えない状態なのだ……」

政務部長は、苦笑しながら言った。

「ここで、なんとか専従者を決めて、自給自足の方向に持って行かねば困ることになる。それで君を所長に任命したのだ。まアひとつ行ってくれ。頼む。すぐ案内させよう！」

政務部長は、有無を言わせなかった。直ちに警備課長を呼び、課付の河原中尉に案内を命じたのだ。山地二等兵曹は、わけのわからぬ儘、黒塗りのフォードに乗せられたのである。そしていま、彼の眼前には、彼が新任所長として赴任を命ぜられた、そのカンビリ抑留所——敵性国婦女子の抑留所が、刻々と迫りつつあった。

「山地兵曹！ 着いたよ」

河原中尉は、自分から車のドアを開けて降りながら言った。

あとに続いて車を降りた山地兵曹は、一瞬、啞然となって、ボンヤリ突立ったまま、その抑留所の入口を見た。太い杭に、鉄条網が張りめぐらされてある。そしてそこには抑留所の標識すらないのだ。抑留所とは名ばかり、鉄条網の中は身の丈以上もある草、草、草なのだ。草ボウボウというよりは、草に埋まっている感じだった。

暑い南方では、草の成長は早い。カヤなんかでも、一、二ヵ月で、二米位になる。それはスコール

で適当な水分をとり、強烈な日光を浴びるためだろうが……。

この抑留所にあてられたカンビリ部落は、オランダ時代サナトリウムとして名高い所だった。抑留者たちは、療養所の十五棟の石造家屋を利用して、生活していた。しかし、それでも足りないのも、俄か造りのニッパ・ハウスが、幾棟が建てられていたようだ。

「いま、大体千八百名だが、そのうち四割は子供だよ。しかし、ややこしいのは国籍なんだ。一番多いのはオランダだが、イギリス、アメリカ、オーストラリア、オランダの混血と数えてゆくと、なんと十一カ国の国籍の女たちがいるんだ。とにかく、マリノ時代と同じく自活させているんだが、この放任主義じゃア早晩といわず、すぐにも経済的に参るね」

河原中尉は、歩きながら、そんなことを補足的に説明してくれた。

山地兵曹は、中尉について、ただキョロキョロと歩くだけで、草むらを押しわけ、押しわけ進んでいると、ヒョッコリ、金髪の子供たちが顔をだし、慌てて逃げて行ったりした。

抑留婦女子の表情は、さまざまだった。

へまた見物にやって来やがった！

というような眼つきで、こちらを睨みつけてくる者もあれば、一方ではへ吾関せずとばかり木蔭で読書にふける者、ふうふう肩で息をしながら、水や薪などを運んでいる女性たちもあった。とにかく統制のない、雑然とした集団だった。

だが、なによりも二十七歳の山地兵曹を驚愕させたのは、その彼女たちの服装である。

とにかく、まともな服装をしている女性たちは一人もないのだ。

ボロボロの、外人特有のバタの襠^すえたような、むツとする臭気をつけたブラウス。それは汗と体臭のせいだろうか。スカートの女性はまれにしか見られなかった。大多数が、ショートパンツだった。なかには、薄汚れたブラジャーと、恥部だけを蔽っている程度のパンツをつけた金髪女性もあった。誇張ではなく、若い山地兵曹の足は慄えてきた。日本の女性たちが、こんな服装で集団生活をしているのを目撃しても、彼は赤面して一步も前へ進めなくなつたろう。しかも相手は外国の、金髪やトビ色の瞳をもった、体格のよい白人女性の集団なのである。

彼は、生唾をゴクリと嚥んだ。

「ハッハッハ、驚いたか？ まア、こんな所さ。でも、あの女たちの服装ぐらいで驚いてはいかんよ……」

河原中尉は、言った。

人々の表情は、みな一様に蒼白かった。栄養失調なのか。ムクミのきたような顔色である。

石造りのサナトリウムは、荒れ果てていた。それよりもひどいのは、急^{こじ}懺えのニッパ・ハウスである。ベッドもなく、日本で言うアンペラであるテッカールを敷いた地面の上に、ごろごろ寝転がっている様子だった。

山地兵曹は、それらの寝転がっている婦人や子供たちが、マラリヤ患者であり、赤痢患者であるらしいことを、敏感に見てとった。